

---

# デンジャラス・ガール

空野 葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デンジャラス・ガール

### 【Nコード】

N4773B

### 【作者名】

空野 葵

### 【あらすじ】

俺、柊飛鳥は高二の不良学生。身長は175cm。容姿もそこそこだと思ってる。もちろん喧嘩には自信があるし、ポリスに世話になったことも一度や二度じゃない。だが、ある冬の日に俺が拾った女の子。そいつは、ヤザより危険な奴だった……！！

## 第一難 最悪の出会い

女の子が、倒れてた。

雪の降る、冬の日だった。

ソファーに寝かされている少女を前に、俺、柊飛鳥ひいらぎあすかは存分にため息をついた。

「何なんだよ、こいつは……」

何故か家の前の公園に倒れていた少女こいつを、雪の中見捨てるわけにもいかずひとまず家に連れて来たが、驚いたことにこいつは金色の髪をしていたのだ。

日本人じゃ……ねえよな。

暖房をフル回転させているためムツとしたリビングで、俺はもう一度、ため息をついた。

何で、せいぜい十二、三歳程度に見える少女こいつがあんなところで雪に埋もれてたのか。たまたま俺が見つけれなければ、間違いなく死んでいたはずだ。

俺は、その子に近づき、金の髪を隠すようにしっかりとかぶられていた白いフードを、何となく手に取る。裏を見ると、かすかに“made in Kelua”と読めるタグが付いていた。

「キー……ルア？」

そんな国、あつたっけ？

ひとしきり悩んでみても、そもそも頭に入っていないのだから出てくるはずもなく。俺があきらめて世界地図を探していると、ドアの横にある電話がけたたましく鳴り響いた。

こんな時に！と舌打ちしながら受話器を取る。

「よお、元気かあ？」

「叔父貴！！」

「いやー、すまんなあ。早く連絡しようとは思ってたんだが」

飄々とした声に、忘れていた怒りがふつつつと湧き上がる。

「今どこにいるんだよ！？ まったく、毎度毎度俺に一言もなく出て行きやがって」

「エ・ベ・レ・ス・ト」

「……は？」

「エベレストだよエーベレーズト！ 世界一高い山の」

「それぐらい知ってる！！」

頭を抱えたいくなるのはこのことだ。叔父は万年放浪癖の旅行家で、たまに日本に帰って来ても、すぐフラッとどこかへ行ってしまう。

それは、両親が離婚して荒れに荒れていた俺を引き取ってくれてからも、全く変わることはない。

……確かこの前はナイアガラだった。  
それよりも。

「叔父貴、また俺のマンガ盗んでっただろ！」

この悪行が許される訳がない。しかも五十冊もだ！

「ケチケチするなよ！ 禿げるぞお？ それより、何か変わったことはねーか？」

あーもう、何でこのおっさんはいつもこのテンションなんだよ！？

「ハゲねーよ！！ 別に変わったこととかも……」

特には と言いつけて、そこで後ろを振り返った俺は愕然とした。

何で今まで忘れてたんだ！？

「ちよつ、ちよつと待ってくれ叔父貴！ 今、俺の後ろに……！！」

「あ？ 何だ聞こえねーぞ。おっともうケータイ電池切れだ。じゃーな」

「え、ちよつと待」

ピツという電子音がして、無情にも電話が切られる。先程までの騒音が消え、沈黙が漂った。

「……………」

俺は力の限り酸素を吸い込み、怒鳴りたいのを必死で抑えた。  
落ち着け、俺。こんなことにいらん体力使うな、俺。

その時、後ろでかすかに女の子が身じろぎした気配がして、俺は  
急いで近寄った。目覚めたかと思ったが、相変わらずぐったりして  
いて意識はないようだ。

息遣いが荒く、痛々しい。

「ち……俺らしくもねえ」

喧嘩で名を馳せたこの俺が、女の子を介抱してるなんてな。

俺は今日何度目かも分からないため息をもう一つつくと、意を決  
してもう一度受話器を取った。警察にはあまりいい思い出はないが、  
この際仕方ない。早くこの子を引き取ってもらおうと思ったのだ。

誘拐犯に間違えられても困るし。

そう自分に言い訳しながらゆっくりとボタンを押す。1、1、  
… その時だった。

「Don't move!!」

いきなり背後から甲高い声が聞こえたと思うと、左手を鈍い衝撃  
が襲う。

「なっ、何だ！ 英語!？」

受話器を見ると、何と深々と小型ナイフが刺さっている。

「うわっつ、一体何……」

慌てて俺が振り向こうとしたその時、耳元でカチツという音がして、何かが頭に押し付けられた。これがどういう状況かを理解する前に、反射的に両手上がる。

毎週のようにテレビでやってる、アメリカ産映画の賜物だ。

受話器が大きな音を立てて床に転がった。長い沈黙の中で、背後の苦しそうな呼吸音だけが、嫌に響く。外国人女強盗か？それとも

……

「Who……are you？」

鮎？ではないよなさすがに。

「え、えーと」

「Be answer！」

「うわ はいっ、あいむ飛鳥 柊。あ、I can't speak English!!」

小学生にも鼻で笑われそうな発音で必死に答える。もちろんまだ死にたくはない。こんな発音で通じるのかと思っただが、意外にも頭に突きつけられていた銃のようなものが少し緩んだ。

「……Japanese？」

かすれた声で問いかけられる。

「い、Yes、I'm Japanese」

その瞬間、部屋に立ち込めていた殺気や緊張感が一気に消えたのが自分でも分かった。すぐに後ろでズズツと壁を擦る音がして、俺はそろそろと両手を下ろし、ゆっくりと振り返る。

熱のせいで潤んだ紫の瞳と目が合った。

思った通り、そこに座っていたのは金の髪の女の子。やはりどうか、何というか、その手にはしっかりと小型の銃が握られていて全く、恩知らずにも程がある。

俺は何か言っただろうと思って口を開いたが、そこから出たのは自分でも驚くような言葉だった。

「大丈夫か？」

するとそいつははっとしたように俺を見て、泣きそうな表情をした。<sup>かお</sup>

そして今にも消えそうな声で呟く。

「すまぬ……ゆるせ」

これが、俺とこいつの最初の出会いだった。

いや、出会いというのもおこがましい、最悪の「初めまして」となったのだ。



## 第一難 最悪の出会い（後書き）

初連載です。

飽き性ですが、どうにか完結できるように頑張ります。  
ここまで読んでいただいて、ありがとうございます！

## 第二難 衝撃

身長150cm前後、流れるような金色の髪、零れるような大きな紫の瞳、そして雪のような白い肌、小さな紅い唇。

そいつは今、俺の目の前に座っている。……あぐらをかいて。

「いやーすまんかった。てっきりわたしを誘拐した奴だと思ったのだ。許せ」

さつきより幾分身体の具合が良くなったのか、そいつ　セーナは、上機嫌で俺の足を叩いた。痛えよ。

セーナはさつき倒れこんだ後、「助けてくれ」と呟いた。だから、俺はとりあえず話だけ聞くことにしたのだ。だが、ずっとこの調子で、なかなか話が進まない。

「案ずるな。ちょっと用事を済ませたら、さつさと出てくでな」

「いや、それよりも、お前の日本語が変」

俺がきつぱり言うと、セーナはかなり不満気な顔になった。

「何！？　これでも、エロいが頭だけは良いDr・Kに一年間みっちり叩き込まれたのだぞ！」  
ドクター・ケー

「知らねーよ！　何だよそのDr・Kって！」

名前からして怪しすぎだろ。

「大体、お前って小学生だろ？ 何で銃持<sup>これ</sup>ってんだよ。そもそもこの国では銃禁止だぞ」

俺がセーナの右手に握られている銃を指しながら言うと、セーナはガバツと立ち上がり、大声で叫んだ。

「失礼なっ、わたしはもう十四じゃー！」

ああもっ、俺が一体何したってんだよ！

++++

結局、三十分間このような押し問答が続き、俺に新しく入った情報、セーナの本名がセーナ・ルー・キャンベラーということ、そして何故か追われている身だということだけだ。

どこから来たのか、何故追われているのか、どうして銃を持っているのか……など、肝心なところは言葉を濁す。俺は少しいらいらして、カマをかけてみることにした。

「お前、キールアって国から来たんじゃないのか？」

「な、なぜそれを！」

思った通りの反応をするセーナに少し安心する。銃を持っていたも、やはり子どもだということに変わりはない。

「そのフードに印刷されてたんだよ。 “ m a d e i n K e l u

a”ってな。ま、どこにあるのかは知らねーけど……

おい、もういい加減教えるよ、お前の理由<sup>わけ</sup>ありの本性とやらを。  
俺は今すぐお前を放り出したっていいんだよ。だが、それでお前はいいのか？ この日本に知り合いはいるのか？」

脅すように言うと、セーナは黙り込んだ。身体が本調子でないのに、この寒空の中に出されるのはさすがに嫌なのだろうか。

そんなことを考えていると、ふいにセーナが立ち上がる気配がした。さつきとは打って変わったような真剣な表情<sup>かお</sup>で、俺の前に座り直す。

そしてとても少女とは思えない低い声で、とんでもないことを言っただの。

「話してもよいが、わたしのことを知った時点でおぬしも一心同体、運命共同体となる。もちろん命を狙われるやもしれぬ。おぬしは命が惜しくないのか？」

皮肉気に、自嘲気味に話すセーナ。俺は思わず咳き込んだ。

「ちょ、ちよつと待て！ お前、命を狙われてんのか！？」

「ん、言わなんだか？」

「当たり前だ！！ そうと知ってたら俺は……！！」

「知ってたら？ とつとと降りた方が賢明だろうな」

「……………！！」

セーナの冷たく、投げやりな声に、ぐつと詰まる。「冗談じゃない。こいつが何者かは知らないが、命云々は想定外だ。」

大体俺は銃なんか持ってないし、平和の中に生きてる日本人なんだよ！そくだ、こいつに一言言えばいいんだ。お前には協力できないと、だから早く出てってくれと。

俺が唸<sup>うな</sup>っている間、セーナはずっと窓の外の雪を見ていた。だがその横顔は、とても子どもには見えなかった。

そして、俺は決断した。

その時のセーナ<sup>こいつ</sup>の顔は、一生忘れられないだろう。

### 第三難 決心

「やってやるよ」

俺はセーナそいつに言った。ただ単につまらない日常に飽き飽きしてたのかもしれないし、命を狙われるという意味もよく理解できていなかったせいかもしれない。だが、セーナこいつに出て行けなどと言えないことは、自分で分かっていた。

もちろん、一度言った言葉が戻るはずもなく。

「なに……？」

セーナがゆっくりと振り返った。その瞳にはありありと、「信じられない」と書いてある。

「聞こえなかったのか？ お前に協力してやるって言ってんだよ」

疑心の瞳が、驚愕の色に変わった。

「おぬし、何を馬鹿なことを……。死ぬぞ」

「あいにく俺は、この平和な日常にうんざりしてたからな。ちょうどヒマだし、付き合ってやるよ」

「本気か！？」

セーナが俺に詰め寄り、襟首を掴む。俺は返事の代わりに、首を

縦に動かしだ。次の瞬間、襟首が緩んだと同時に、軽い衝撃を感じる。セーナが座っている俺に抱きついてきたのだ。

「もう、もう逃げられんぞ！ おぬしは仲間になったのだから！」

はいはい、と髪をなでやると、わずかに肩が震えているのがわかる。そして聞こえるかすかな嗚咽。

こんな強がり言って、変な日本語使って、拳句の果てに銃を持っているセーナこいつだが、やっぱり子どもで女の子なんだなーと、俺は妙に納得したのだった。

+++++

それからしばらく経って、セーナは俺から離れ、床に座り直した。泣いたのが恥ずかしかったのか、頬がうつすらと染まっている。そして少しずつ、自らのことを話し出したのだった。

「わたしの国、キールアは、ヨーロッパと中東の間にある小さな国だ。つい最近独立したばかりのな。

だが、隣国の支援を受けた軍のクーデターが起こり、政界に属する人間はほとんど殺された」

セーナは、ぐっと手を握り締める。

「ちょっと待て。そんなのニュースでもやってなかったぞ」

俺が慌てて言うと、セーナは何でもないように、「そうか」と言った。

「この国は平和だが、他国の理不尽さを見てみぬフリをすることがある。

しかし、厄介事に頭を突っ込まないことも、平和を維持する方法だ」

まるで政治家のような発言に、俺は目を丸くする。何か言おうとしたが、セーナは続けた。

「わたしは女学校の寮に入っておった。まあそこは比較的裕福な、政界・財界に通じる子どもが通っておる。そして、クーデターが起こったと同時に、奴らは攻め込んできたのだ。

ひどい有様だった。わたしと同室の友人も……殺された。わたしは必死に隠れておったのだが、奴らに見つかり捕まったのだ」

映画のような話だ　俺は素直にそう思った。セーナには悪いが、まだ頭がついていきそうにない。

「奴らの一部は軍のヘリを民間機と装い、隣国ではなく日本に來た。そこでしばらく潜伏しようとも思ったのだろ。わたしは隙を見て抜け出し、逃げ回っているところを、おぬしに助けられたというわけだ」

ふんふんと俺は思わず納得しそうになるが、妙な違和感を覚え、考え込む。

普通、こんな女の子をわざわざ日本まで連れて来るか？ただ誘拐するためだけに？

「ちよい待ち。それで結局お前は、キールアって国で何をしてたん

だ？ 何でお前だけ日本に？」

「それは、わたしがキールア国、トリー・ラゼ・キャンベラー大統領の一人娘だからだ。母上がおらぬから、ファーストレディ役を務めておる。

奴らは父の暗殺に失敗したからわたしを食い物に……ん？ エサというのか？ まあいい。おとりにしようと考えたのだろう。馬鹿な奴らだ」

はい？？ 何か、すごいことを聞いた気が……大統領！？

「は！？ お前大統領なのか！？」

思わず身を乗り出す俺を、セーナは冷めた目で見た。

「阿呆、大統領の『娘』だ。もちろん父の仕事を手伝っておるがな。それより、おぬしの方こそ何者だ？ まだ名も聞いておらぬが」

理解に悶え苦しむ俺を、セーナは覗き込んだ。俺は今更ながらそのことに気づく。

「え？ ああ、悪い。飛鳥、柊飛鳥だ。今は十七歳、学生だ」

しどろもどろに言う。

するとセーナは、花が開くようにふわりと笑い、右手を俺に伸ばしながら言った。

「そうか。アスカ、以後よろしゅうな」

「お、おう」

お互いにそつと握手する。こうして俺は、めでたくこの逃走劇に  
加わることとなったのだ。

### 第三難 決心（後書き）

ちなみにセーナの格好は、コート代わりのフードと薄茶色の膝丈までのスカート、短いブーツです。

読んでいただき、ありがとうございます！

## 第四難 脱出

俺は、怒っていた。

もう許せん！なんだあいつ！！ちくしょーどうせ俺はしがない日本人だよ！！

事の発端は、握手したあの後、今後どうやって追っ手から逃げるかという話し合いから始まった。

この日本には、セーナの味方は俺だけだ。俺は警察に行つて保護を頼めばいいと言ったのだが、一笑されて終わる。日本の警察は当てにならないらしい。

まあ、確かに銃もろくに使えないんだから仕方ないか……。

俺はそう納得して、次にこの家にじつとして助けが来るのを待てばいいと言った。だが、この案も却下される。セーナ曰く、

「もう奴らは近くまで来ておるだろう。見つかるのも時間の問題と  
いうことだ」

だそうだ。俺はもちろん驚いた。どころか、心臓が飛び出そうになった。

それでとにかく、ど田舎にある俺の祖父<sup>じい</sup>さんの家に非難しようと提案したんだ。だがこいつは……！！

「飛鳥、おぬし……足が短いのう。その足では、奴らからは逃げ切れぬかもしれぬ」

なんて言いやがった！！ しかも気の毒そうに、ため息までついて。

俺はこれでも長い方なんだよ！ めっちゃ傷ついたぞコノヤロー！

そして、今に至る。

「なあ、もういい加減機嫌直さんか。足の長さで人生が決まるわけでもなし」

セーナがおずおずと、そつばを向いた俺に近づいて来る。っていうかおまえ、フォローする気ないだろ。

俺は、無言でリュックに金や服を詰めた。両手は使える方がいい。横をちらつと見ると、セーナはしょんぼりしたように俯いていた。

…仕方ねえな、そろそろ許してやるか。

そう思い、俺が顔を上げたその時だった。

ピンポーン

呼び鈴が静まり返った部屋に不気味に響く。セーナが、はっとしたように外を見て、急いで立ち上がる。そして、出ようとした俺を

制した。

「何……」

「分からぬか。あやつらだ」

「うそだろ！？　こんなに早くか？」

「静かにしろ。ここには秘密の抜け道はないのか？」

「あるわけないだろっ」

秘密のつてなんだ秘密のつて。

そうこうしている内に、外の奴らはドアを思いつき叩き始めた。今にも突き破られそうなその音に、脚が震える。

……情けねえ。だが、次の言葉に俺は目を丸くした。

「警察だ！　開ける！」

カーテンの隙間から覗くと、確かに見覚えのある制服姿が三、四人確認できる。

「おいっ、警察って言ってんぞ？　国からの助けじゃないのか」

「たわけ、そんなわけなかるう。言ったであろっ、『警察は信用できない』と。…この国の警察幹部に、奴らの協力者がある。おそらく外にいる奴らにも、わたしを追っている奴らが紛れ込んでいるはずだ」

「……」

セーナは冷静に俺に爆弾投下すると、フードを着込み銃を構えた。

「お、おい何する気だ？」

「決まっておる、応戦するだけのこと。秘密の抜け道がないのだから仕方なかるう。ああ、おぬしはその辺に隠れている。」

「出来るわけないだろ！ 来い！ 俺ん家を戦場にするなっ」

もう何がなんだか分からない。俺はとにかく本能の命ずるまま、セーナを連れて階段を駆け上がった。二階の俺の部屋に入ると同時に、玄関が騒がしくなる。とうとう侵入されたようだ。

あーもうっ、お前ら捜査令状持ってんのかよ！？ ぜってー橋弁護士に訴えてやるからな！

緊張と恐怖のせいで、頭がおかしくなりそうだ。だが死にたくないければ、何とかするしかない。

「おいアスカ！ おぬしどうする気だ！？ これでは逃げることも  
」

セーナが怒ったように叫んだ。確かにこの狭い六畳部屋には隠れるところもない。だが

「うるせえっ、とつと来い！」

俺はリュックを背負い、一気に窓を全開にする。そして棧さんに足をかけると、隣の家屋根に飛び移った。

セーナも一瞬戸惑ったようだが、すぐに続く。家の中では、尋常でない物音がしていた。

俺は早くここから離れたくて、急いで次の屋根に飛ばうとする。そして促すように後ろを見ると、セーナが、ほくほくと嬉しそうな顔をしていた。

「おい、何してんだっ、早く行くぞ」

「そうじゃ。日本の家はとても小さく、隣の家にくっついていてとドクター・ケー Dr・Kに言われたのを忘れておった。このような使い方が出来るとは、天晴あっぱれじゃ」

「お前：一言多いんだよ」

そうして俺は、若干十七歳にして、日本中の警察から追われる身になったのだった。

合掌。

#### 第四難 脱出（後書き）

今更ですが、文章間に空白が多すぎて、読みにくいと思います。  
パソコンで読んで下さっている方々にお詫びします。

## 第五難 追手

「これから、どうすっかなー……」

俺は何となく呟いた。俺の肩には、熱が上がったらしいセーナがもたれかかって眠っている。目の前には、一面の夕焼け。

どうにか家から脱出した俺たちは、すぐにタクシーを拾い駅に直行した。そして急いで電車に乗ったのだが、前の駅で事故があったらしく、かれこれ三十分以上停車している。

始めは焦っていらいらしていた俺だが、周りの平和そうな乗客を見ているうちに何か不思議な気持ちになってきた。

まるで、今までのことが嘘のように感じたのだ。

「全部、夢だったらなー」

どこかの国で、クーデターが起こったことも。

セーナが銃こっしを持っていることも。

俺が、追われていることも。

「は…馬鹿みてー」

俺は苦笑いしながら、窓にこつんと頭をつけた。しかし、目に飛び込んできた景色にぎくりとする。

警察！！

「おいっ、セーナ！ 起きろ！」

「んー何じゃ……」

「警察だっ」

飛び起きるセーナ。俺たちは傍目にも怪しい慌て方で車両を移動した。そして警官が乗り込んでくる直前、空のトイレに駆け込む。

「乗客の皆様、ご迷惑をかけて申し訳ありません。前の駅で起こっている事故について説明したく……」

すると、気の抜けるような、見るからに温和そうな声が扉越しに聞こえてきた。

俺たちを探してるんじゃないかったのか……

俺はほっとして横にいるセーナを見るが、セーナの顔は真っ青だった。

「おい？ どうした」

「この声は、…奴らの一人だ」

「まさか。こんなに日本語きれいなのに？」

「わたしを攫った奴らの中に、一人だけ日系人のような奴がおった。そいつだ。」

確か名は……カイト」

まじかよ、と俺が言おうとした時、俺らがいる車両にそいつが入ってくる音がした。セーナと二人息を押し殺していると、ちょうどトイレの前を通ったそいつが、ぽつりと呟くのが分かる。

「ち…手間かけさせやがって」

「！！」

全身に、鳥肌が立った。

やっぱり俺は、とんでもないことに足を突っ込んでしまったのかもしれない。

++++

頼むから早く向こうに行ってくれ！

俺は拳を握り締め、少しでも音を立てないように全神経を集中した。

警官の格好をしたカイトという奴が、先程から俺らのいるトイレの前から動かないのだ。どうやらこの中まで探る気らしい。

もちろん、トイレには窓などあるはずもなく。

「よいかアス力。おぬしは一般人を装って普通に扉を開けて出る。もし奴が入ってきたらわたしが撃つ」

セーナが耳元で囁いた後、向かい合っている壁に両足をつけて登

り始める。

「な……！　おい、撃つのか？　ここは電車の中だぞっ」

同じくひそひそ声で返す俺。

銃の威力はよく知らないが、確実に音で周りにはれるだろう。つて、それより撃つのか！？　日本<sup>こっ</sup>で！

「大丈夫だ。これにはサイレント機能がついておる。少し変な音があるだけじゃ」

そんな問題じゃねー！

もう一度文句を言おうと上を見るが、セーナは既に銃を構え、戦闘状態に入っていた。俺は息を大きく吸うと、ガラツと扉を開ける。

一体、どんな奴が……？　やっぱりサングラスは必須なのか！？

「！！」

固まった。

アフロだ……こいつ。

## 第六難 反撃

アフロ、あふろ、アフロ、あふろ……

俺の頭の中で、この単語が暴れ回っている。

俺は約十秒、呆然と突っ立っていた。

ビシツと決めた青い制服、少し浅黒い肌の端正な顔立ち、溢れ出る髪の毛……

限界だ。

「く、クク、あははははははっっ!!」

人目も憚らず爆笑し、慌てて前を見ると、カイトも呆然としていた。そして呻くように言う。

「柊…飛鳥？」

「へ？ 何で俺のこと知って」

「離れるアスカ！」

俺が驚いていると、セーナが前にいる奴に向けて銃を発射した。

ぼひゅん……

うわゝほんとに変な音だ。

「ぐ……!!」

アフロが大きく揺れてその場に片膝をつく。

初めて見る光景に、俺は息も出来ない。撃たれたのはアフロのはずなのに、俺にも激痛が走った気がした。

「ち、外したか」

「ま、待てセーナ！ こいつ死んじまうぞ！？」

更にアフロに狙いを定めるセーナを慌てて止める。しかし躊躇する様子はなく、俺をキツと睨んだ。

「何を言うアスカ！ こいつは国を混乱に落とし入れ、わたしの友を殺した奴らの仲間だ！

今殺らねば我らも危ないのだぞっ、どけ！」

「でも……！」

でも俺は     ！！

次の瞬間、俺の耳元で鼓膜が破れるほどの轟音がしたかと思うと、一発の弾丸がセーナに向かってゆく。間一髪で避けたセーナだが、バランスを崩し、床に倒れ込んだ。

「セーナ……！」

ゆっくりと立ち上がる、小さな身体。

「たわけ、だから言っただであろっ。今殺らねば……我らも危ないと」

カチリ、と音がして振り返る。  
嫌な笑みを浮かべたアフロが、銃を構えていた。

俺は

「感謝するぜー坊主。これでやっと任務終了だ。さあ、来るんだセーナ・ルー・キャンベラー、大統領をおびき寄せるエサにさせてもらうぜ」

「くっ……」

セーナの顔が悔しそうに歪んだ。その瞬間、目の前が真っ白になる。

オレ、の、せ、いで。

「あああああっ!!」

気がつくと、俺はアフロに向かって蹴りを繰り出していた。俺に注意をしていなかったためか、見事に腹にクリーンヒットする。

「ぐ……、貴様あつ」

思わず竦<sup>すく</sup>み上がるような恐ろしい眼を向けられるが、今は構ってられない。

俺は、すぐに啞然としているセーナの腕を掴んだ。

「ア、アスカ!？」

「とにかく逃げるぞっ」

アフロの怒声を聞き流し、俺はトイレを飛び出て、開いていたドアから外へ出た。そして線路を渡り、フェンスを乗り越えて住宅街へ逃げ込む。

「これで逃げられると思うなよっ、日本中がお前らの敵だ！」

そんなアフロの捨て台詞を、俺たちが身をもって理解するまで、あとわずかか。

## 第六難 反撃（後書き）

アフロを引つ張りすぎました。すいません…  
それにしても、広いトイレですね（笑）

## 第七難 逃走

「なあ、アスカ。おぬし……なぜあいつを庇ったのじゃ？」

住宅街を抜け、商店街に辿りついたところで、セーナがぽつりと言った。

その言葉に怒りは感じられない。ただ、心の底から疑問に思っているのが分かった。

「……」

俺が答えられずにいると、セーナは俯いた。

「お前の知り合いだからか？」

俺は驚いて顔を上げる。

「そうじゃねーよ！ あんな奴見たこともねえ。俺の方がびつくりだよ」

「そうか。では何故じゃ？」

逃げることを許さない強い瞳。俺はため息を一つつくと、まと纏まらない心中を素直に伝えた。

「よく分かんねーけど……お前に人を撃たせなくなかった」

「なに……？」

セーナが俺の顔を驚いたように見つめる。

「だから、お前に人を殺してほしくなかったんだ」

俺が前を向いたまま言くと、セーナは乾いた声で「ははっ」と笑った。

「何を言っておる。私は大統領の娘だ。今までにも殺されかけたことなど何度もあるし、人を撃ったこともある。今更、同情などいらん」

突き放すような冷たい言葉。

だが俺は、セーナが声とは裏腹に、泣きそうな表情かおをしているのに気づいていた。

いつから、こんな生活まいにちを送ってきたんだろう。

どんな思いで、銃を使ってきた？

どうして、こいつは…

俺は、首を少しだけ左下に向ける。

俺の胸までしか無い身長、枝のような、細い腕。

……セーナこいつは、まだこんなに幼いのに。

「それでも…撃たせたくなかった」

「……っ！」

空を向いて呟くように言くと、セーナが息を呑んだ。そして一言だけ、小さな声で返す。

「…そうか」

空には、既に一番星が輝いていた。

++++

あれから何となく無言だった俺たちだが、にぎやかな商店街を歩くとくに、他愛無い話をするようになった。セーナは活気がありすぎるような商店街が珍しいらしく、「これは何じゃ」とか、「道が狭いのう」とか矢継ぎ早に俺に話しかける。

始めはそれを微笑ましく思いついてやったが、俺は、何故か嫌な予感がしていた。根拠などない。ただ、首の後ろがちりちりするように感じた。それだけだ。

俺はセーナを人混みから連れ出すと、フードのずれを直しながら小声で言った。

「おい、何か視線感じねーか？」

お前ちゃんと髪隠せよ。ただでさえ目立つんだから」

「奴らか！？ …いや、気配はせぬが」

「でも何か感じるんだよ。他に心当たりはねーのか？」

するとセーナは腕組みをして、大真面目な顔で言った。

「ふむ。そういうのを確か……自意識過剰と言つのだとDr・Kが」

「なっ、そうじゃねーよ！　ってまたDr・Kかよ……」

一気に脱力感が襲う。

おつかしいな、確かにそんな気がしたんだが……

すると。

「ねえ、あなた……柊　飛鳥……君じゃないかしら」

おずおずと不安そうな声が俺の後ろから聞こえる。振り返ると、見知らぬ五十歳位のおばさんが立っていた。

「そうですが……何で俺の名前を？」

俺が聞き返すと、その人は「ひっ」と言つて数歩下がり、今度はセーナの方を向いて言つた。

「じゃあっ、あなたがセーナちゃんね！？」

「なっ！？」

目を丸くするセーナ。何故この人がセーナのことを……？

「あのっ」

俺が話しかけると、その人は怯えた様子で逃げ去ってしまう。

何なんだ……？

「お、おいアスカ、これは…」

かすかに裾を引かれてセーナの方を見ると、不安そうな顔があった。

「どうした？」

「皆が我らの方を見ておる…」

「何？」

俺が慌てて周りを見渡すと、ほんの少しの間に人がかなり集まっていた。皆、一様に俺たちを見て、何か話している。

「…ねえ、警察呼んだら？」

「!?!」

不意に聞こえた声に身震いする。一体、何が起こってるんだ……!?

「っ、走るぞ！」

またもセーナの腕を掴み、人が少ない方へ駆ける。何人かが悲鳴をあげ、数人が俺たちを追ってきたようだった。そして混乱している俺の頭に衝撃的な言葉が耳に入ってきたのは、商店街を後少しで抜けようとする時。

「…今日の午後、在日外国人のセーナちゃん十四歳が、高校二

年生で十七歳の柊飛鳥容疑者に誘拐されました。警視庁は柊飛鳥容疑者を指名手配し、行方を追っています。セーナちゃんの身長は150cm前後、金髪で白いフードをかぶっています。なお、未成年の全国指名手配は極めて異例なことであり……」

「な……ん、だと……?」

次の瞬間、電器屋の前に置いてあるテレビに、俺とセーナの顔写真が大きく映された。

「アスカっ、これは……!」

セーナが悲鳴のような声を上げる。俺はというと、呆然として声も出ない。後ろから近づいてくる人の気配がしても、何も考えられなかった。

「ちっ、走れアスカ!」

今度はセーナが、突っ立っている俺を引っ張り走り出す。俺たちは全ての人から逃れるため、暗闇に向かって走った。

『日本中がお前らの敵だ!』

まるで呪文のように、この言葉がいつまでも頭から離れなかった。

## 第八難 白夜

「ちくしょう…まだ、追って、きやが…る！」

俺はセーナの手をぐいと引くと、細く暗い横道に滑り込んだ。もう子供が寝る位の時間なのに、周囲には人々の怒号や悲鳴が渦巻いている。

その全てが自分たちに向けられたものだとは、とうに理解済みだ。しかし、サイレンが何重にも響く音がし、汗が浮かぶ。

商店街を出てから約一時間……俺たちはひたすら人のいない方へと走り続けていた。

「おいっ、大丈夫かセーナ！」

小石に躓いて転びかけた影に向かって叫ぶ。

「…この位平気じゃ。だが、少し水が飲みたい…」

「水？ ちょっと待て、そこに自販機が…」

「いたぞ！！ お巡りさん、こっちこっ…うわあっ」

目の前で叫んだ男の横をすり抜けながら、首の後ろを肘で強く殴る。手加減したいところだが、くたくたの身体では無理だ。

これで俺も立派な犯罪者だな…と苦笑しながら、俺とセーナは再び闇に紛れた。

++++

「はっはっ…こ、ここなら、しばらく見つかんねーだ、ろ」

俺は固く冷たいコンクリートの床に座り込んだ。喉と脚が悲鳴を上げている。

「アスカにしては、上手く、か、考えたものじゃ」

「あーお前うるせえ」

俺たちは町外れにある、灯りも壊れているような小さな公園に逃げ込んだ。そしてそこにある古びた土管みたいな遊具に身を潜めた。ここなら、ひどくなってきた雪も防げるし、警察も、まさかこんな所にいるとは思えない。

「そうだ、セーナ水は…」

どうする、と後ろを向いた俺は、積もった雪を食べているセーナと目が合った。

「なっ…お前なー」

思わずため息。この、猿みたいに雪食ってる奴が大統領令嬢かよ…なんか涙が出てきた。

「ん？ おぬしも食べるか。わたしの国には降らんだが、雪もけっこう美味だのう」

「そーかよ…」

喉の渇きに耐えかねて、一口雪を食べて見る。  
涙のせいかしょっぱい味がした。

「それは酸性雨味じゃ」と言われ、俺が雪を吹き出しそうになったのはまた別の話。

気温はどんどん下がり、凍えそうな夜が迫っていた。

## 第八難 白夜（後書き）

この話がかなり短いのは、隙間？みたいなものだからです。早く次の話を投稿したいと思ってます。だから続いています。ここまですんでいただき、本当にありがとうございます！！

## 第九難 転機

「アスカ…さむいの…」

「ああ、さみーな…」

マジで凍え死にそうだ。多少風雪は防げるとはいえ、土管の中は氷の城状態だ。身元がばれてる以上、ホテルにも旅館にも泊まれねーし、第一そんな金もない。

『今暖を取れるなら、例え刑務所の中でもよし！』的なことがぼんやりと思い浮かんだ時、今まで大人しかったセーナが横で何かこそごしてるのに気づいた。

「おい、何して…って、マジで何！？ お前とうとう自殺願ぼつつ…」

セーナの手刀が俺のこめかみに直撃する。

「た・わ・け。ほれ、この雪山に遭難したときの心得其三、『手と足の感覚が無くなってきたら、人肌で温め合っべし』ちゃんと本にも書いてある」

「今時少女漫画でもやんねーぞそんなネタ。ちょっと見せて見ろ…って、これ何語？ 読めねえ」

「キールア語じゃ。ちなみに著者は」

「Dr・Kだろ…」

「違っぞ。父だ」

「父って、大統領！？ あーもう、親子だな…」

「ようやく理解したか。ほれ、アスカもとつと脱げ」

「出来るか！！ …しゃーねーな、これでも着とけ」

俺はリュックサックから予備の着替えを出すと、セーナに投げた。セーナが大人しく着込んでいるのを見てほっとする。

「…仕方ない。見つかる危険性もあるが、大型スーパーに入り込もう。そこなら今夜、凍死することはないだろ」

「だが…！」

「トイレにでも籠ってれば、防犯カメラにも映らねーよ」

「そうか、…そうだな」

渋々頷いたセーナと共に、土管から脱出する。その時、俺のケータイが甲高く鳴り出した。

「うわっ、誰からだこんな時に俺にかけてくるなんて…」

ケータイの表示を見ると、『谷崎淳一』となっている。俺の昔の仲間だ。今更何をしているながら、セーナに黙っているよう合図し、会話ボタンを押す。

「……もしもし」

「飛鳥！ 本物か！？」

「そうだけど…何なんだよ、もうお前とは縁切ったはずだよ」

「いいからいいから。それよりお前、何やってんだよ。テレビで  
前の顔見たときマジびっくりしたぜ」

「これには理由があんだよ。冷やかしたら切るぞ」

俺が冷たく言うと、向こうは焦ったように続けた。

「ちげーよ、お前、今どこに隠れてんだ？ どうせ公園とかだよ」

その言葉にぐっとつまる。……バレバレじゃん。

「なあ、俺の家にこねーか？ お前も場所は知ってるだよ。ここな  
ら絶対わかんねーよ」

確かにあいつの家は郊外の古びたマンションの最上階だ。だが…

「どうしてお前が俺を助けようとすんだよ。それに、マジで犯罪者  
かもしれねーぞ」

突然電話をかけてきて家に来いなんて出来すぎて。俺は強い  
口調で理由を迫った。すると、電話口から静かな声が聞こえてくる。

「…後悔してんだよ。あの時、全部お前に責任なすりつけちゃった  
こと」

「……」

「だから、ずっとお前に謝りたかった。これで罪滅ぼしてわけじやねーけど……」

「『百合子』はもういいのか？」

「それは……！ と、とにかく、待ってるから。気をつけて来いよ」

「お、おい？」

かかってくるのも突然なら、切るのも突然だ。俺は電話をかけ直したが、淳一が出ることはなかった。

「くそっ、一体何なんだよ」

「『百合子』はお前の想い人か？」

待つうちにまた寒くなったのか、再び土管の中に入り込んだセーナが尋ねる。だが俺は、答えることが出来なかった。

「……とにかく、移動するぞ。ここからなら歩いて二十分位で着く。もう警察もいないだろう」

「スーパーではないのか？」

「ああ」

俺があまりに神妙な顔をしていたせいか、自分の顔を引っ張り笑わせようとするセーナの頭を軽く叩き、俺は古びたマンションを目

指した。

何となく嫌な予感がするのを振り払うように、雪を思い切り踏みしめながら。

## 第十難 拉致

「ここか？ アスカ。随分と汚い所だが…」

「ああ、ここだ」

俺は約二年ぶりに訪れた部屋の前で思考を巡らせていた。

本当に、罨じゃないのか？まあ、あいつに警察の知り合いはいないと思うが…

ちらりと隣の扉を見る。やはり、人は住んでいないようだ。

「どうしたアスカ？ 入らぬのか？ 中に怪しい気配はせぬぞ」

「あ、ああ。分かってる」

俺はドアを軽くノックする。インターフォンが壊れているのは知ってるから。するとすぐに中から淳一が顔を出した。気のせいか、顔が青ざめている。

「…久しぶりだな。どうした？ 顔が青いみてーだけど…風邪か？」

淳一は、二年前とは想像もつかない程弱々しく笑った。髪はぼさぼさでよれよれのトレーナー。その顔は、引き攣っているようにも見えた。

「おい…？」

「と、とにかく、中へ入ってくれ。話はそれからだ。…その子がセ

「ナって子かい？」

「ああ。セーナ・ルー・キャンベラーだ。よろしく頼む」

セーナが答えると、淳一はほっとしたように頷き、俺たちを部屋に入れた。

++++

「で？ 何で俺たちを助けるようなことをするんだ淳一。誘拐犯を突き出して有名人にでもなるつもりか？」

ソファーに腰掛けると、俺は核心を突くため、わざとムツとするようなことを言った。だが淳一は、軽く受け流す。

「そんなにつんけんするなよ。言っただろ、ずっと謝りたかったって。…もうグループは解散したけど、あの事を忘れてる奴は多分いない」

「……」

「だから、謝りたかったんだ」

淳一の言うことに多分嘘はない。だが、何か引っかかるのは、俺の今の現状のせいかな？

俺と淳一が二人して黙っていると、横で正座していたセーナが小声で俺に言った。

「な、なあアスカ。トイレに行きたいんじゃないが…どこにある？」

「へ？ ああ、トイレなら玄関のすぐ横だ」

「わかった」

二人して、セーナがぱたぱたと駆けてゆく方を見つめる。ふいに淳一が口を開いた。

「セーナあのこ…随分お前に懐いてるみたいだけど、どういつ関係なんだ？ 本当にお前が誘拐したとは考えられないし」

俺は苦笑いする。

「まあ色々あつてな。詳しいことは言えないが、追われてるんだ。」

そんなことを話していた時、リビングにある電話と子機が一齐に鳴り出した。時計を見ると、もう午前二時を過ぎている。俺は、部屋に戻ったセーナと共に、電話の声に耳を澄ました。

「も、もしもし…」

今にも倒れそうなほど真っ青な顔で電話に出る淳一。

やっぱり、何かある…。

俺は確信した。同時に、早くここを出たほうがいいと感じた。

セーナに合図し、そろそろと玄関に向かう。嫌な汗が、首を伝った。

「待ってください！　ちゃんと協力しますから！！」

受話器に向かい、気が狂ったように叫ぶ淳一。そして出ようとしている俺たちに気づくと、すごい勢いで近づき、俺の左腕を掴んだ。

「ちよつ、離せよ！！」

「…ごめん飛鳥。でも、美佳が、妹が殺されるんだ！」

「なっ！？」

次の瞬間、俺は足を払われ床に倒れ込む。「アスカ！」とセーナが悲鳴のような声を上げ、淳一に銃を向けた。

「アスカから離れる！　さもないと…」

「ここまでだ」

パンツ、という音がして、ドアから五、六人の男が入ってくる。セーナは信じられないという風に目を丸くした。そこにいたのは…

「アフロ！？」

「カイト！！」

警官の制服じゃなく、黒いスーツを着ている姿は前より凄みを増している。

アフロはゆっくりと胸元から拳銃を取り出すと、淳一に押さえられて動きが取れない俺に向けた。

「止める！　アスカには関係ない！！」

セーナがそう叫んでアフロに銃を向ける。だが、アフロはくくく  
と片手で額を押さえて笑った。

「そんなことはないでしょう。こいつはあなたを誘拐し連れまわした。我々の予定も大幅に狂ったんですよ」

嫌に丁寧な口調を使い、俺を冷たい目で見下ろす。俺は一瞬にして全身に鳥肌が立った。息も思うように出来ない。

殺気だ…これが、本物の…

「う…く…」

何か言い返そうとするが、声すらまともに出なかった。

「さんざん手間をかけさせた礼に、あなたにはここで死んでもらいます」

「な、に…?」

横で淳一の「ひっ」という声がした。セーナが息を呑むのが分かる。カチリ、と音がして、俺の頭に銃を突きつけられた。俺はぎゅっと目を瞑る。

ここまでか……

パンツという乾いた音が響き、何かが落ちたような音がした。いつまで経っても来ない衝撃に、俺はそっと目を開ける。そこには、銃を構えるセーナと驚愕の表情をしたアフロがいた。

「アス力を撃つのは許さぬ」

セーナがアフロの落とした銃を片足で押さえながら、アフロに銃を向ける。

しかしアフロは慌てる様子もなく、静かに言った。

「……さすがですね、銃を撃ち落とすなんて。やはり国で、二を争う使い手だけのことはある。だが、今ここで私を殺したとしても、この人数から逃げられますか？ 外にも大勢待機させてあるんですよ」

「……」

まるで子供を諭すように言われ、セーナは唇をかみ締めている。周りの人間が、一斉に銃を構えた。

俺は、何も言えない。そろそろと、怯えたように淳一が俺から離れた。

「さあ、どうしますか？」

俺がセーナ、と声をかけようとした時、セーナが口を開いた。そして出てきた声はどこかで聞いた低いもので。

「……よからう、カイト。では、アス力たちに危害を加えるな。その代わり、わたしは抵抗せずおぬし等の元へゆく。これでどうじゃ。言っておくが、今すぐにでもおぬしを撃てるのだぞ」

「ほっ……」

「お、おい、セーナ！」

俺は急いで起き上がった。だが、再びスーツを着ている奴らに肩を掴まれ身動き出来なくなる。

一体、何を言ってるんだ…？ お前がこいつらに捕まれば、国が危なくなるんだぞ…！

「まあ、それでいいでしょう。あなたがそこまでこいつに情を移すとは思いませんでしたが。元々外国人を巻き込むのは本意ではありませんでしたし、人質も解放しましょう。では、こちらに」

「……ああ」

セーナが銃を下ろすと同時に、アフロがセーナの右手を掴み、そのまま外へ引つ張ってゆく。

俺は、それを呆然と見つめていた。

何で、何で、何で…！ 俺は、何の為に前を…

「セーナ！ おいセーナ待てよっ、何のつもりだお前！ 何でアフロなんかに着いてくんだよ…！」

自分が何を言っているかも分からないまま、俺はむちゃくちゃに叫び続けた。しかしセーナは振り向かず、ドアの向こうに姿を消す。

「うるさい奴だ。おい、少し黙らせとけ」

低い声がして、俺を押さえつける黒スーツ達。それでも俺は叫び続けた。叫ばずにはいられなかった。頭に浮か

ぶ、ひとつの言葉。

俺は、また、守れなかった……！

「ちつくしよ　　！！」

次の瞬間、俺の頭が硬い物で殴られ、意識が遠のく。目の前の景色が、少しずつ細くなり、完全に暗闇となった。

俺は、また……

雪は、冷たい雨に変わっていた。

## 第十一難 残照

俺には好きな、いや、憧れてた女がいた。

「君たち、こんな所で何してるの？」

「ああ？ 何だてめえ」

二年前の真夏日、建物の影で淳一とタバコを吸っていた俺にいきなり話しかけてきた女。他人をうっとおしく感じていた俺は、振り向いてそいつを睨んで…言葉を失った。

「その制服、駅前の高校のでしょ？ ダメじゃない、まだ未成年なのに」

そう言うてからかうように俺たちを見る女は、見たことのないような美人で。長いストレートの髪と白いワンピースが、とても似合っていた。

「て、てめえには関係ないだろ！」

思わず上ずる声。すると彼女はバックの中からクッキーの包みを取り出すと俺たちに渡し、啜くわえていたタバコをさっと取り上げ、笑った。

「それで我慢しなさい」

それが、百合子だった。

++++

「あれ？ 君この前の……」

「げ、この前のおせっかい」

「なーにー！？」

「うわっ、何す…ちょ、ちょっと淳一、早く開ける！！」

凄い顔で追いかけて来る彼女に、慌てて俺はドアに向かって叫んだ。溜り場の一つだった淳一の部屋の隣が一人暮らしの彼女の部屋だったと知るのは、あれから五日後のこと。

「なあ…あんたどうして俺たちなんかに構うんだ？ 何やってるかも分かんねーのに」

ある日俺は彼女に尋ねた。…初対面から三ヶ月程経った頃だろうか。

普通なら、見るからな不良に声をかけたりしない。ましてや毎日のように手作りの菓子を差し入れてきたり、一緒に麻雀なんかするはずない。

あの日から突然、俺たちのテリトリーに侵入してきたこの奇妙な女は、しかし確実に俺たちに影響を与えていた。

つまらない喧嘩が減り、皆、笑うようになった。淳一のように恋心を抱く奴もいたし、あれこれ世話をやかれて迷惑そうな顔をしながらも、姉のように慕っている奴もいた。

……俺も、そうだったのかもしれない。『家族の愛情』というものに、飢えていたのかも、しれない。

「……弟と、似たような年だからかな。何かほっとけなくてね」

俯いて、ぼつりと呟いた言葉。

「弟……？」

「うん、弟。二年前、病気で死んじゃったけど」

そう言つて、俺を見た彼女は泣きそうな顔をしていて。俺は初めて、他人の感情（ひと きもち）を理解したいと、思った。

++++

ゆっくりと倒れてゆく、目の前の影。

俺は必死に手を伸ばしたが、彼女に届くことはなかった。

冷たく硬いアスファルトに叩きつけられた百合子は、身動きひとつ、しなかった。

「百合子！ おいつ、しっかりしろ！！」

淳一が青ざめた顔で立ち尽くすのを横目に、俺は必死で彼女を起こした。百合子を車ではねたドライバーが、慌てた風に駆け寄ってくる。

「百合子！？ 返事しろよ！ こんな怪我くらい、どうってことな……」

俺は息を呑んだ。百合子を抱き起こした右手には、おびただ夥しい鮮血が染み付いていた。

即死。

それは、ニュースを見ていれば毎日のように流れてくる言葉で。

でも俺は、こんなにも呆然としている。何をしてもいいかも、分からない。仲間から、何故百合子の傍にいなかったんだと責められても、何も感じなかった。

俺のせいだなんて、自分が一番分かってる。あの日彼女を連れ出したのは、俺なんだから。

「嫌いだ……」

寂しい、葬式だった。

あいつは、天涯孤独の身だった。親しい友人と、遠い親戚、それに俺たちだけが百合子を見送った。

「女なんて、嫌いだ……」

自分だって辛いくせに、いつも他人ひとの心配ばかりして。そうして忘れられなくて、消えるのか？ 何ひとつ、残さずに。

女は皆、そうなのか？

ならばもう、

「俺は、女とは…関わらない」

その日から、呪文のように自分に言い続けてきた言葉。

なのに、あいつが突然やって来て、俺を必要とするから。

俺はもう、どうしていいか分からない。

「セーナ……」

未だ覚めない意識の中で、無意識に呟いた。

## 第十一難 残照（後書き）

本当に更新遅くなりました…

すみません（泣）

そろそろラストパートです。

駄文ですが、最後まで読んで頂けると嬉しいです。

## 第十二難 父親

「やはり……だったか」

「しかし今から……まだ……」

「う……」

人のぼそぼそとした声が僅かに届く。すぐ傍に大勢の人が居る気配がして、俺はうつすらと目を開けた。

「目覚めたかね？」

落ち着いた、心地よく響くテノールの声が、目の前で発せられる。視線を少し上げると、紺のセーターに白のスラックスというラフな格好をした中年の男が、俺の横にしゃがみ込み、俺を見下ろしていた。

あんたは……？

そう言い掛けた俺は、そいつの後ろを見て息を止める。そこには、黒いスーツを纏った奴らが……

「……！！」

一気にフラッシュバックする記憶。俺はガバツと起き上がり、目の前の男に掴みかかった。ざわめく周囲を、その男が片手を上げて黙らせたのに気づかぬまま。

「てめえ！ セーナを、どこにやった！？」

ほとんど押し掛かる状態で襟首を締め上げる。しかし男は冷静な目で俺を見、言った。

「…そうか、やはりセーナは連れ去られたか。一足遅かったようだな」

悔しそうに歪む横顔。俺は思わず目を見開いた。

「え、あんた…って、うわっっ！」

次の瞬間、俺の身体が宙を舞い、床に叩きつけられる。手加減されていたようだが、背中がかなり痛む。

一瞬で、頭に血が上った。

「ふむ。最近の日本人は受身もまともに出来ないらしいな。JYU DOを習っていないのか？」

「うるせーよ！！ 何すんだ一体！ ってゆーか誰だよあんた！？」

衝撃でまだ立ち上がれない俺は、精一杯声を張り上げる。

敵か味方が分からないうちは刺激しない方がいいと分かっちゃいたが、いきなり技をかまされた俺の怒りは、なかなか収まりそうになかった。

こんなことしてる間なんかねーのに！！

俺が睨みつけると、相手の目がずっと細められる。そしてゆっくりとした動作で再び俺に近づくと、口を開いた。

「失礼した。私はトリー・ラゼ・キャンベラー、セーナの父親だ。初めまして、柊飛鳥君。君の顔はテレビで何度も確認させてもらったよ。ちなみに後ろにいるのは私のボディガード達だ」

近くで見ると俺より背が高く、少し髭を生やしている四十歳位の男は、転がっている俺に手を差し出しながら苦笑した。良く見ると、優しい紳士面をしている。

「へ……？」

んな馬鹿な、とか、じゃあ何でそんな余裕なんだよとか、思い浮かんだ言葉は沢山あったのに、俺の口から出た言葉は意外にも冷静なものだった。

「セーナの……ってことは、キールア国の大統領なのか？」

ズキズキする頭を押さえ、自力で身体を起こす。もう何があっても驚かない程度のふてぶてしさは身につけたつもりだ。すると目の前の紳士は少し驚いた顔を見せた。

「……そうか。セーナはそこまで君を信頼していたか。ならば話は早い、私はこれからセーナを助けに行く。出来れば君に協力してもらいたいのだが」

淡々と、というよりのほほんと話すどうやら大統領っぽい男に、俺は苛立った。

「あんた馬鹿か！？ どうしてあいつを早く助けに行かねえんだよ！俺のことなんか放っというて早く行けよ！！」

周囲がぎよつとするほどの声で、俺は叫んだ。最も、何も言わないところを見ると、日本語が分からない奴ばかりらしいが。

セーナが拉致されて一時間は経っている。今も命が危ないかもしれないって時に、こいつは…！

「…本当に、セーナは強運の持ち主だな。君という存在に、随分と救われたことだろう」

「何を言って…」

俺が馬鹿呼ばわりしたにも関わらず、相手は怒ることもなく静かに呟いた。そして何と座っている俺に向かって、深々と頭を下げたのだ。

仮にも、大統領という地位を持つ男が。

「君…いや、アスカ。どうか私たちに協力してはもらえないだろうか。ここの地理に不案内で、動きが取れないんだよ」

呆然と見ている俺に、真剣な表情で、更に言葉が続けられる。

「もちろん、断っても構わない。今までセーナを助けてくれた君には感謝している。…それに、君を危険にさらしてしまうかもしれないからね」

最後の言葉はちやかすように言われたが、それは俺が断りやすくする為だと気づいた。

それと同時に俺は口を開く。なるべく自分が真剣な顔をしていることを願いながら。

「行きます。俺を、連れて行ってください」

今度は、俺が助ける番。

あいつばかり、格好つけさせたりはしない。

「それで、いいのかね？」

迷ってなんか、いられない。

「はい」

もう二度と、失わないために。

## 第十二難 父親（後書き）

相変わらず話進んでません…。  
こんな話ですが、読んで下さる皆様に感謝です。

### 第十三難 苦悩

「どづいつことですか!？」

俺は、黒塗りの車に向かって叫んだ。

++++

「この場所が分かるか? アスカ」

高級そうな車の中で手渡されたのは一枚の紙切れ。無言で、殴り書きされた文字を目で追う。

「桜山市手塚町3・5・168……あー、これって…」

見覚えのある隣町の住所に納得する。あそこはただでさえ人口密集地帯で家がひしめいているのに、最近再開発が始まり、一週間前にあった家や道路が跡形もなく消えたりして、迷う者が少なくないという専らの噂だ。

「どうだ? どの位で着ける?」

「多分、30分もあれば」

「了解した。…Go!」

運転席からイエッサーという声がして、車が動き出す。俺は信号や角のたびに「次右」とか「そこ左」とか指示していたが、合間を見計らって横に座る大統領に話しかけた。

「あの、キャンベラーさん。セーナは…その」

…ああもう！ 誘拐された子供の父親に、子供が無事かどうかなんて聞けるはずねーじゃん！！

俺は喉から出かかった言葉を無理矢理飲み込む。

すると俺の様子を見ていた大統領は軽く微笑み、「大丈夫だよ」と言った。

「え…？」

「トリーでいいよアスカ。セーナはおそらく無事だ。奴らの狙いは私の命だから、大事な人質を殺す訳がない」

「それって」

「例え、大統領である私を殺したとしても、あの国には国民が選んだ議会がある。今は混乱しているだろうが、そう簡単には潰れないだろう。…きっと」

「……やつと得た自由と民主だ。今更、奪われる訳にはいかない」

まるで自分に言い聞かせるような言葉に、俺は思わず大統領から目を逸らす。

例えすぐ隣に居ても、この人とは次元が違うんだと感じた。

それが何となく辛くて、……重くて。

「そ、そういやトーリさんは、どうして日本語そんなに上手いんですか？」

気付けばわざと明るい声で、そんなことを口にしていた。

瞬間、大統領ははっとしたように顔を上げ、苦笑いする。そして何事も無かったように、再び軽い口調で答えた。

「いや、実は日本人の親友が二人いてね。昔日本に住んでいたことがあるんだ」

「親友…ですか」

「ああ、君もよく知る人物だ。もう一人も顔くらいは知っていると  
思うよ。それなりに有名人だから」

「え？ 俺も知ってるって…」

あまりにさらりと言われた言葉に驚きながら横を見た瞬間、車が突然急ブレーキをかけ、俺は大いに頭を打った。

涙目で頭を抱えうなっていると、大統領が運転席の人と話すのが聞こえてくる。

「どうした？」

「日本の警察です。まだ我々には気付いていないようですが…」

「……！」

心臓がひっくり返るような動悸。俺は窓にへばりついて前方を見

た。確かに、かすかな赤色灯が見える。  
大統領がため息をついた。

「……ここまでだな。アスカ、ここをまっすぐに行つて、二つ目の角を右に曲がり、橋を超えて四つ目の建物だったね?」

「は、はい」

「そうか、では君にはここで降りてもらいたい。そして闇に紛れて、元来た道を急いで引き返すんだ」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

「え……何でそんな……」

「……すまない、アスカ。だがこれ以上、君を危険な目に遭わせるわけにはいかない。それに、私は元からこうしようと決めていたんだ。……さあ、もう時間がない、早く」

まだ呆けている俺を、黒服の男たちが丁寧に、でも有無を言わず車から降ろす。

「ど、どういふことですか!??」

俺は閉じられたドアを叩こうとしたが、次の瞬間、俺の声を消し去るような爆音をあげて黒塗りの車は走り去った。  
続いて、何台分ものサイレンが響き渡る。

「何で……」

再び静かになった暗闇の町で、俺は車が走り去った方を呆然と見ていた。

## 第十四難 潜入

「君に協力してもらいたい」

「これ以上、君を危険な目に遭わせるわけにはいかない」

俺は、大統領発の、この二つの台詞を何度も何度も反芻し、ある結論にたどり着いた。

…矛盾してるだろ、おい。

大統領の（余計な）気遣いに、妙な怒りが湧き起こる。  
何だろうこれは。まるで冒険に一人置いていかれた、脇役のようなむなしさは。

俺は近くに放置してあったポリバケツを、力一杯蹴り上げた。そして白み始めた空の下を走る、目の前の道路を睨みつける。

ここは俺の国、俺の町だ。あんたら部外者に命令される筋合いはこれっぽっちもない！！

そうだ、何を躊躇っているんだ。俺は、何のためにここにいる？

俺はぐつと足に力を入れると、全力で走り始めた。雪を踏みしめる音がし、俺の息は白く染まる。もう捨てたと思っていた、不良の血が騒いだのかもしれない。

テリトリーを守ろうとする、野良猫のように。

+++++

「ようこそ、Mr・president・ここまでお越し頂き、感謝しますよ」

カイトがその口調とは裏腹に、歪んだ笑みをトーリに向ける。トーリは静かにため息をついた。

「出来れば君とはこんな形で会いたくなかったよ、カイト。…そして、マハグ元大臣」

「おや、私はまだ大臣ですぞ。まあ更にひとつ地位が上がるのも間近ですが」

カイトの横の椅子にどつしりと腰掛けた、いかにも脂ぎっている男は、トーリに見下した目を向けた。

もう使われていない古びた廃屋の最上階で、一国の運命を握る話し合いが続く。

「単刀直入に言う、今すぐ全ての悪事から手を引け。…これ以上母国を虐げるのは止せ」

「はっ、今更何を言う。外国の圧力に負け、民主とやらを選んだ結果がこれだろう！…俺はあんたを許さない、養父を殺したあんたを！…」

カイトが鬼気迫る表情で、トーリに詰め寄ると胸倉を掴んだ。

++++

どういう、ことだ…？ 大統領が…殺し？

俺は無事に建物までたどり着くと、苦笑した。全く、何で今日はこんなに過去を思い出すことばかり続くんだろう。ここは、元、溜り場の一つじゃないか。

この場所なら、隅から隅まで知り尽くしている俺にとって、侵入は簡単だった。つまり、中に入らなければいい。俺は所々突き出している釘や出っ張りを足掛けにして、慎重に壁を登った。

そして最上階である4階の窓枠に手をかけた瞬間、怒号が聞こえ、俺は咄嗟に身を屈めた。

幸い、小さなベランダらしきものがあり、足場には困らない。しかしアフロの怒声は更に続く。

「あの人は、親に捨てられ身寄りの無い俺を、家族同然に扱ってくれた！ それをあんたは、あっさり切り捨て死に追いやったんだ！  
！」

中の様子も分からないのに、アフロが泣いているのが分かった。次々と、キールア国の過去が暴かれてゆく。

民主制に移行した当初の混乱、相次ぐ官僚の不正、大臣の汚職、  
… 罷免された大臣の、自殺。

「彼は確かに優秀で潔癖な人物だった。だが、彼は欲に負けた。大金に目が眩み、他国に機密を売り渡していた。… 決して許されることではない」

あくまで淡々と、大統領は語る。

「嘘だ！ あの人がそんなことをするわけがないっ、お前がはめた

んだろっ!!」

その悲鳴のような声と同時に、銃声が響き渡る。俺は隠れていることも忘れて窓に張りついた。

アフロの手に拳銃が握られ、そこからかすかに煙が出ている。しかし平然と立っていることからして、大統領に怪我はなさそうだ。

そうして何気なく、アフロとでぶい人がいる場所の後ろに視線を移した俺は、目を丸くした。

セーナ!!

つい数時間前に別れたばかりなのに、安堵で涙が出そうになる。

セーナは、大統領側からは布で遮られているため互いに気付いていないが、大統領親子の間の距離はわずか数メートルだ。

しかしそんな悲劇的な状況でも、セーナは変わっておらず…

両手両足を椅子に縛られ、猿轡を噛まされているそんな時でも、精一杯脱出しようとまるで軟体動物のように体を動かしていた。

「くっ…くっ…」

思わず小さく笑いが漏れる。幸い怪我もなさそうだと判断した俺は、もう一度慎重に辺りを見渡した。

足元には、武器にもなりそうな細いパイプ。意外にも、双方の黒服の姿は見えない。

そしてセーナのいる場所の真上には…排気口。

いける。

俺は再びしゃがみ込むと、排気口の入り口を探し、潜り込む。もちろん、長年使用されていない中の様子は、人間の言葉じゃ言い表せないような惨状だったけれど。…男は、度胸だ。

数分後、やっとの思いでセーナの真上まで登った俺は、くもの巣だらけの蓋の隙間から下を覗き込んだ。セーナの金髪が見え、再び話し声が聞こえる。しかし、今度は嫌に野太い声　でぶい奴だ。

「カイト、これ以上話しても無駄だ。大統領、私はあなたと昔話をするためにここにいる訳ではない。今すぐに、あなたの権力、地位、財産を譲ることを承諾しなければ、命の保障は出来ない」

「黙れ、国を裏切った者に、何もいう権利はない！ 私の権力、地位は国民によって与えられたものだ。貴様などにやれるはずがないだろう！」

あのジェントルマンな大統領が声を荒げている。怒るのは当然だが、事態は確実に悪化している。

「…ほう、ではあなたは、実の娘でさえも見殺しにすると？」

「…！ セーナがここにいるのか！？　貴様、私が来れば解放すると言っておきながら…！」

「はははははは、これはおかしい！　私をクーデターの首謀者扱いしておいて、正攻法を信じているなど！　ちなみにあなたの部下は別室で寝ていますよ…永遠にね」

「くっ、セーナ、どこだセーナ…！」



## 第十四難 潜入（後書き）

皆日本語で会話しているのは、気にしないでください…

## 第十五難 疾走

落ちる……!!

俺は衝撃を覚悟し、固く目を閉じた。一瞬後には、まるで雷が落ちたような爆音がし、周りから悲鳴が上がる。

「アスカ!？」

セーナの驚いた声が、した。

++++

「……あれ？」

銃声がいつまで経っても聞こえないのに気付き、そろそろと目を開ける。恐る恐る前後を確認するが……誰もいない。

体中が打撲で悲鳴を上げるが、構っているヒマはなかった。

どうなってるんだ？

「アスカ!！」

え。俺が声のした方 上を見上げると、穴の開いた天井から、セーナの顔が覗いている。

「セーナ！ お前、何で上……に……」

違う。景色が違う。俺はようやく理解した。俺は……床をぶち抜いて下の階に落ちたんだ。普段なら爆笑ものだが、今は感謝するしか

ない。おかげで、大統領親子に対しての攻撃も中断されているようだった。

俺はセーナに向かって叫んだ。

「セーナ！！　そこから飛び込め！　早く！」

「ア、アスカ！？　しかし…と、父様！！」

いち早く察したのか、大統領がセーナを抱えて飛び込んでくるのが見え、俺は慌てて飛びのいた。

スタツ、と見事な身のこなしで降り立ったジェントルマン。映画の中では拍手喝采だろう。ただし、お姫様抱っこされている金髪の美少女が、椅子に縛り付けられてさえないなければ。

「アスカ！　とにかくここを出るぞ！！」

すばやい動きでセーナの縄を解いた大統領が叫ぶ。言われるまでもなく、俺は頷いた。ようやく我に返ったらしい黒服が、穴から銃を向けたのが分かる。

「こっちだ！」

隣の部屋へ続くドアを抜け、内側から机や椅子、ボロボロのパソコンや機械でバリケードを作る。そして廊下へ出て階段を降り、脱出する。

単純だが完璧な方法のはずだった。しかし…

「アスカ！　下から奴らが上がって来るぞっ」

「何だって！？」

今にも駆け下りそうだった足を寸でのところで止める。確かに、大勢の足音が近づいて来ていた。

「味方じゃないのか!？」

「「ない!」」

親子そろって断言される。どーする? どーするよ俺!?  
パニくるあまり意味もなく歩き回る俺。その時、鮮やかに甦った、なつかしい記憶。

なあ、飛鳥。あの建物、屋上があるの知ってるか?

はああ? 何言ってるんだよ淳一、そんなものねーだろ屋根があるんだし

いや、外からは分かんねーけどあるんだよ。まあ、屋上って言うても狭いし、見えるのは隣のビルくらいだけどな。行き方は…

「…屋上だ」

「アス力?」

「屋上に行くぞ! ついて来い! あ、いや、ついて来てください」

仮にも大統領に向かって、命令形はないだろう。俺は慌てて言い直し、方向転換した。そして二人が来るのを確認し、一見倉庫にも見える非常扉をこじ開ける。一気に、冷たい風が入り込んできて、身震いした。

目の前には、人が一人やつと通れるほどの錆びきった外階段。

やべえ、これマジで壊れそう。上ったら天国行けそう…

自分の想像に思わずしり込みするそんな俺の前で、親子がとどめの一言を吐いてくださった。

「ほらセーナ、これがニンジャも愛用しているナワバシゴだ」  
「ほうほう。日頃から危険な訓練を積んでるのじゃな」

ちっげーよ!!

## 第十六難 危機

「くっそ…、ああもうっ、開かねえ!!」

情けないことに、セーナの服を軽く掴みながらようやくたどり着いた屋上…の扉の前。

見た目からして頑丈すぎるこの扉は、押しても引いてもびくともしなかった。カギだ、カギがかかってるんだ。

おやくそく

そんな言葉が脳内に浮かび、俺は頭を抱えた。仕方ない、ここは諦めてこんなヤバい階段から、一刻も早くおさらばしよう。このままじゃ、敵に見つかる前に、ご臨終してしまう可能性もある。

すると、しゃがみ込んだ俺の両肩にぽんと手が置かれた。

「へ?」

「どいてなさい、アス力」

「アス力、邪魔だ」

振り返った俺が見たものは、嫌に黒光りする銃を持つ親子の姿だった。

ぎゃあああああ!!

+++++

「し、信じらんねえ…」

一体どこから出したのか、見事な銃さばき&コラボレーションで、扉のカギどころか扉そのものをぶち壊した二人を代わる代わる見る。哀れ、扉だったものは、無残にも床に転がっていた。

そして、俺はようやく気付いた。

この親子は、加減を知らない。…気づくの、遅！！

「あのーこれから、どうします？ 正直言つと、ここから何も考えてないんですけど…」

思わず敬語になる俺。セーナが、「なにー！？ 考えとらんのか！」という容赦ない突っ込みを入れる。しかし大統領は、銃を懷にしまいながら軽く微笑んだ。

「ああ、大丈夫だよアスカ。もうすぐ助けが来るはずだ、どこかに隠れていよう」

「助け、が来る？」

「ああ、それも強力な助っ人がね。だから…」

パン！！

乾いた音。続く、一瞬の静寂。

「父様！！」

目の前で、まるでスローモーションのように倒れてゆく大統領。セーナの悲鳴が、遠くに聞こえた。

「何…」

大統領を支えることも出来ぬまま、呆然と見つめる俺。だが、大統領が視界から消えた瞬間、入り口にいるアフロの姿を捉えた。不敵にも、にやりと笑うアフロ。

「カイト、貴様…許さん…!!」

地を這うような声で言ったセーナが銃を構え、アフロはセーナに銃を向ける。

相打ち…! その言葉が思い浮かんだ時、俺は無我夢中で持っていたパイプをアフロに投げつけ、セーナに向かって走り出した。

「アスカ!?!」

「来い!!」

カイトが顔をかばって体勢を崩すのを横目に、俺はぐったりした大統領をどうにか抱えて屋上の隅へ走った。どころか、片手でセーナの腕まで引っ張っている。火事場の馬鹿力というものは、実在した!!

建物の影に隠れ、アフロの視覚からどうにか逃れると、俺はすぐさま遙か下の道を確認した。隣のビルとの間にある薄汚い小路のため、人通りはない。

俺は必死で目を凝らし、ある物を探す。思ったとおり、そこには、数年前とほとんど変わらない光景があった。

「セーナ、飛べ! 早く!!」

俺はセーナの背中を押し、大統領をしつかりと担ぎ上げた。

「ど、どこへじゃ！？ 天国はまだ早いぞ！！」

青褪めた顔で反論するセーナ。銃には顔色ひとつ変えなくせに、高いのは苦手らしい。

「分かてるよつ、死にたくなかったら 飛べ！！」

俺のどこにそんな思い切りのよさがあつたのか分からない。ただ、俺がセーナを無理矢理引っ張り、大統領を抱えて廃屋の屋上から飛び降りたのは確かだった。

成功率？

そんなの、知らねーよ。

## 第十七難 負傷

息が、出来ねえ…！

背骨を中心に襲う、凄まじい痛み。

さつき排気口から落ちたのとは次元が違う、気を失いそうな衝撃。

俺は、必死で耐えるしかなかった。

+++++

「げほっ、ぐっ…！！」

自分が激しく咳き込む音で、覚醒する。全身がバラバラになりそう  
うだ。一瞬頭が朦朧もうろうとするが、横を見て一気に血の気が引いた。

「セーナ！！ おいつ、しっかりしろ！」

セーナはぴくりともせずに、横たわっている。慌てて呼吸を確認  
し、どうにか生きていることが分かった。

「セーナは…無事かね？」

俺の横で、同じく体を打ち付けられた大統領が掠れた声で呟いた。  
俺は急いで駆け寄り、助け起こそうと肩に手をやった。

しかし俺の手は、あつと言う間に血に染まる。

「血！？ あの、これって…！！」

「心配ない、銃弾の傷だ。貫通しているし、もう痛みも感じないよ。それより、セーナは？」

「あ、はい。セーナは無事ですが…目覚めなくて。ほんとにすいません！！俺がこんなことしたから…」

俺は勢いよく頭を下げた。今にも追手が来そうな状況で、こんなことをしている場合じゃないかもしれない。でも謝らずにはいられなかった。セーナがこのまま目覚めなかったら？目の前が真っ暗になる。

「君が謝る必要なんてない。むしろ感謝しているよ。おぼろげながらも、君たちの会話は聞こえていた。…ここは、ゴミ捨て場かね？」

「…はい」

つまりこうだ。この廃屋の隣には、タイヤ工場がある。そのせいでこの道にタイヤが大量に投棄されているのだ。誰も片付ける奴なんかいないから、必然的に、量は増えていく。今では一軒家並みの山になっているそこに、俺たちは飛び降りた。

だが、やはりタイヤは固く、ダメージは計り知れない。生きてるのが不思議なくらいだった。

「アスカ、セーナを起こしてくれ。早くここから出なければ」

大統領が、右腕に布を巻きつけながら俺に言った。

「でも、脳震盪とか起こしてたら…」

「セーナには柔道も教え込んである、受身は完璧なはずだ。ここで捕まれば、命に関わる」

「は、はいっ、セーナ、おいつ、大丈夫か？」

大統領の言うとおりだ。俺はセーナの頬を軽く叩いた。幸いにも、反応が返ってくる。

「ん~~~~？」

「おいつ、大丈夫か！？ 起きろ！」

「……………さい」

「え？」

「ゴムくさい」

…そりゃそうだ。辺り一面泥と雨水まみれのタイヤばかりなら。俺は笑いがこみ上げるのを我慢して、今度は強めに頭をはたいた。

「起きろセーナ！ 早く逃げっぞっ」

「うおっ、ア、アスカ！？ 私は…」

未だ状況が飲み込めていないセーナをゆっくりと立たせる。

「どっか痛いところねーか？ 走れるか？」

「走れるが…全身の骨が痛いと言っておる」

「そ、そうか、何とかなるだろ。大統領！ オツケーですっ」

大統領が頷くのを確認して、とりあえずこの不安定な足場からの脱出を試みる。やつとのことで平坦な地面に足を着けた時、後ろを歩いていた大統領が俺に尋ねた。

「アスカ、この辺に、屋上がある高い建物はないか？ 出来れば広い方がいい」

「え…？」

「助けは、空から来るんだよ」

その言葉はイマイチ（というか全く）理解出来なかったが、俺が咄嗟に思い出したのは学校だった。確か近くに、5階建ての中学校があったはずだ。

「こっちです！ セーナ、行くぞ…！」

今まで後遺症のせいかぼんやりしていたセーナだが、やっと思い出したようで、何やらぶつぶつ言っている。俺はまたしても腕を引き、大統領に向かって合図すると走り出した。しかし。

「マジかよ…」

ようやく校舎にたどり着こうとした時、一台のパトカーが前を横切り、急停止した。

「容疑者発見！ 繰り返し、容疑者発見！ 応援求む！！」

警官の一人が大声で無線に叫び、もう一人が銃を持ってじりじりと近づいてくる。

すっかり、あんたら警察の存在忘れてたよ…

「…うざいのー」

セーナがぼつりと言った言葉に、俺は大いに賛成した。

## 第十八難 決着

「あのー、囲まれちゃいましたけど…」

「ああ、その通りだアス力」

「うむ。その表現がぴったりだな」

そうじゃなくて！！

+++++

俺たちは、今校庭のだ真ん中にいる。

二十人位いる警察官は、俺たちの目の前にいる。  
親子は俺の、横にいる。

やばいよな〜何かもう危機感とか無くなってきたけど。

そんなことをぼんやりと考えていると、太った警察のおっちゃん  
が、拡声器で俺たちに向けて叫んだ。

「おーい！ 被害者の方たち〜無事ですか〜？」

そんなもん無くて聞こえるだろーが。…ん？ 被害者？

「被害者って、誰だ？」

俺は後ろで仏頂面をしているセーナに尋ねる。

「知らん。皆被害者だ」

言われてみればその通りだ。…俺が一番被害を受けてる気がするが。

「柊 飛鳥ー、大人しく銃を捨てて投降しろー」

俺かよ！？ しかも銃を持っているのは俺じゃなくて、あんたらが被害者扱いしているこの親子だよ！！

俺が自分が指名手配されているのを思い出し、大声で全部ばらしたい衝動に耐えていたとき、またしても爆弾が投下された。

「投降しない場合はー射殺命令も受けているー！」

「げ、マジ！？」

「マジである！」

間の抜けた声とは裏腹に、警官達はすばやく腰のフォルダーから拳銃を取り出し、一斉に構えた。

もちろん、俺照準で。

「ちょっと、待…」

このままじゃ、アフロたちに追いつかれる前にオダブツだ…！

俺が慌てて両手を挙げて、戦う意思がないことを分からせようとしたとき、ふいに右手が掴まれ、下ろされた。

「時間だ」

「え…」

大統領は、空を見て嬉しそうに言った。セーナと俺もそれに続く。かすかに、音が聞こえた。

パラパラパラ……

何の変哲もない、毎日のように見る景色。  
朝日の中、一機のヘリが近づいて来る。

「いたぞっ、捕まえろ!!」

とうとうアフロの声が聞こえた気がしたが、ヘリの音で何も聞こえない。俺があっけにとられていると、その黒いヘリは俺たちのすぐ傍に降り立った。風で砂埃が舞う。そして――

「我々の、勝利だ」

大統領は、それは優雅に、笑った。

+++++

ヘリのドアが開いた瞬間、一気に黒い影が数人飛び出した。その人たちは俺たちを庇うように前に立つと、拳銃とは比較にもならない位の重装備でアフロや警官を威圧する。背中には…SAT!?!  
警官は訳が分からないらしく、物凄く焦っていた。安心しろ、俺も全く分からない。

そんな馬鹿な、だって、俺は警察に追われてて…

俺の脳は、パンク状態だ。その時、ヘリの中から、マイクで声が響いてきた。

「警告する。本件はこれより、特殊機動部隊の管轄下に入った。各警官は、すみやかに持ち場へ戻れ。…これは、首相命令である」

「しゅ、首相!？」

俺は思わず叫ぶ。ヘリからゆっくりと降りて来るのは、俺でも知ってる超有名人、高里首相だ。小さな悲鳴が聞こえて後ろを見ると、息も絶え絶えなアフロと一同が拘束されているところだった。

あっけねえ…

俺って一体…訳も分からず落ち込む俺の前で、大統領と首相が抱き合う。肩書きで言うところ、かなりすごい感じだ。

「遅れてすまなかった、トーリ。無事だったか？　すぐに病院を手配する」

「いや、時間通りだ。助かったよユウイチ」

「すまないな、警視總監がまさか向こうと繋がっていたとは知らなくてな、即刻処罰したよ」

もう60を過ぎている高里首相は、初めてほっとしたように、微笑かに笑った。

「どうして首相がここにいる!？」

信じられないというように、拘束されているアフロが叫ぶ。大統領はどこか苦しそうに言った。

「私の交友関係を把握していないからだ、馬鹿者め。…何故、私がお前を国外追放したのか分からないのか？　まだ若いお前が、新しい人生を歩めればいいと…」

「黙れ！！　何と言われようと、俺の国はひとつだ！」

「…そうか」

無表情だが、少し嬉しそうな顔で大統領は呟く。

「どうする？　この者たちは日本でも裁くことは出来るが…」

高里首相が提案する。確かに国内が大変な状況になっているだろうキールアに、犯人を連れ帰っても、余計混乱するだけだろう。しかし大統領は首を横に振った。

「いや、ユウイチ、連れて帰るよ。皆キールアの国民だ。また面倒をかけるが、手配してもらえるか？」

「仕方ないな。さて、もうすぐ子供たちが登校してくる時間だ。ひとまず撤退しよう。セーナちゃん、飛鳥くん、君たちも乗ってくれ」

まるで返事を分かっていたように、やれやれと高里首相が首をすくめた後、俺たちに声をかける。ヘリに乗るのはかなり気が引けたが、俺はとりあえず頷いた。セーナに続いてこわこわと乗り込む。

友人つてのは、首相のことか…でも、だとしたらもう一人は？  
俺も知ってるって…

そんな疑問は、座席に座った俺の後ろから聞こえてきた声で吹き  
飛んだ。

「よう飛鳥。色々楽しんだみてーじゃねーか」

「お、お、叔父貴！ 何でここに！？」

「おおDr・K、久しぶり。まだ生きておったか」

はあああああ！？

「よ、セーナ、どうだ初めての日本は？」

何ヶ月振りかに見る叔父貴は、口をパクパクさせている俺に構わ  
ず、「旅行楽しんだか？」というような軽い口調でセーナに話し  
かける。

「それなりに楽しかったぞ。さすがDr・Kの国じゃ」

た、楽しかったって…楽しかったてえええ！？

「お、おいどういことだよ！？ Dr・Kって…」

「あーばれちまったか。まあ、俺は昔からあいつのダチでな。あい  
つに頼まれてセーナに日本語教えてたんだ」

マジかよ！？ それじゃこのおっさんは、エベレストとかナイア

ガラの滝に行くとか言つといて、キールアで出稼ぎかよ！

…そっぴや叔父貴が登山道具とか持つてるの、見たことねえ！

気づかなかつた自分に悲しくなる。

「じゃあ、Kつてのは…」

柊 圭太郎

「おーじーきー！ セーナに変な日本語とか、間違つてる常識教えんじゃねえ！！」

俺はすべての元凶に詰め寄る。だが、相変わらずの飄々ぶりだ。

「いやーしかし、セーナが日本に行ったとは聞いたが、まさか飛鳥に会つてるとはなあ」

「うむ。私も驚いたぞ、名前は同じだと思つておつたがな」

もう、どうにでもしてくれ。

俺は、はははと力無く笑うことしかできなかった。

## 第十八難 決着（後書き）

次が最終話です！

読んでくださる方、本当に感謝します。

## 第十九難 最高の別れ？

忘れられる訳がない。

こんな、衝撃的な一日を。

++++

翌日の朝早く、俺は首相と共に、どこかで見たような黒塗りの車で空港に向かっていた。叔父貴は相変わらず行方不明だ。

「すまなかったね飛鳥くん。君を指名手配させるはめになってしまった。何と謝ればいいか分からないが…」

横から聞こえた神妙な声に、俺は慌てて首を振った。

「い、いいえ！ それ位どうってこと…ある…けど…」

『それ位』のはずがない。俺の携帯は、たった一日で三ヶ月分以上はあるだろう受信メールを押し付けられていた。家の電話もあまりにもうるさいので、受話器を上げっ放しだ。

そして、俺やセーナのことは、あれから一切報道されていない。間違いでした、とも、事件は解決しました、とも。

「もちろん君のために、あの報道が誤りだったことを何度でも放送したい。だがそれでは…」

「分かってます。首相が国交も結んでいないキールア国に協力した

ことがばれれば、国際問題ですよね」

俺がそう言うと、首相は驚いた顔をして俺を見た。…失礼な。俺だって学習するんですー

「その通りだよ、飛鳥くん。正直、『無かったこと』にしたいというのが本音だ。下手に弁解するより、忘れてもらう方が都合がいい。…最低の首相だね、私は」

苦笑する首相。その自嘲的な笑みが何故か大統領と重なり、俺は思わず叫んでいた。

「俺は全然平気です！ それに、その、全部『無かったこと』なら、首相が落ち込むのはおかしいんじゃないですか！？」

うわ、何か変なこと言っちゃった！ しかも首相に向かって、「おかしい」とか言っちゃったよ！？」

俺の頬を冷や汗が伝う。しかし首相は、一瞬ばかんとした後、大声で笑い始めた。

「は、ははは！！ 最高だよ飛鳥くん！ そうだな、全部無かったことだな。いや、すまない。もう君には驚かされるばかりだよ」

「そ、それはどーも…」

とりあえず、一件落着か…？ 俺はまだ笑い続けている首相を横目に、そう思った。

+++++

「アスカ、来てくれたのか！ 天晴れじゃ！！」

空港に着くと、相変わらず変な日本語で叫びながら、セーナが駆け寄って来た。空港と言っても、田舎の小さな空港で、俺たちの他に人は見当たらない。そしてセーナも、昨日の印象とは随分変わっていた。

「どうじゃアスカ。この格好、変ではないかの？」

俺の前で、セーナがくると回る。黒色のワンピースに、黒の靴、そして対照的な白色のコート。黒に金髪が映え、はっきり言って昨日よりずっと大人びて見える。思わず言葉に詰まっていると、セーナが悲しそうに言った。

「…キールアでは、犠牲者がたくさん出たからな。追悼の意味で黒を着たのじゃ。ほら、父様も」

「え…」

そういうことを言いたかったんじゃないくて…

しかし結局何も言えずにセーナの示す方を見ると、確かに全身を黒で包んだ大統領が佇んでいた。そして、白いセスナの前で首相と話した後、こちらに向かって軽く手を振る。

「セーナ、出発するぞ。いいか？」

心臓の鼓動が早まる。これが、もう最後なんて信じられなくて、俺は思わずセーナの手を掴んだ。

「アス力？」

「あ、いや、その、気をつけろ…よ？」

何言つてんだ、俺。

助けてすぐに銃を向けられて、散々ヤバイ奴らから逃げ回るはめになって、あげくビルからダイブして。拳げればキリの無い悲惨な一日。…のはずなのに、何故か俺はその元凶を引き止めてしまったらしい。

拾った猫に愛着が湧くってやつか…？

俺が自分の行動に戸惑っていると、ふいにセーナが俺の両手を掴み、一言、「小さくなれ」と言った。

…しゃがめってことだよな？ 俺が言われたとおりにしゃがんだ瞬間、額に触れる、微かな感触。セーナが、してやったり、というように笑った。

「また会える、まじないじゃ」

「なっ…、お前、何！？」

「ふふふふ、日本人はつぶじゃのうー、Dr・Kの言ったとおりじゃ」

「~~~~~!!」

後ろで大統領と首相が笑っている。俺は一息ついて怒るのを我慢し、言った。

「頑張れよ」

「無論じゃ」

短い会話。だけど、それだけで十分だった。おそらくもう会うことは無いだろうが、これが俺たちには似合いだ。  
出会いも突然なら、別れも突然だった。

「じゃあな、アスカ」

「ああ」

俺は、セーナが機体の中に消えるのを、黙って見送った。

++++

一カ月後、つい最近物凄い一日を経験した俺は、何をする気にもなれずぼんやりとテレビを見ていた。もちろんキールア国のことは何一つ報道されていないが、あの国の様子を、近隣の国の様子から少しでも知れればと思ったのだ。そんな時、電話が勢いよく鳴り響き、俺はしぶしぶと受話器を取る。

「はい、柊…」

「おー飛鳥くん！ 元気かね？」

「た、高里首相！？ 何で、お、叔父貴なら今いな…」

俺はぎょつとして受話器を落としそうになる。だが、電話の相手は楽しそうにとんでもないことを言ってくれた。

「突然すまないが、君を今度の対キールア国友好大使に任命しようと思っ  
てね。引き受けてくれるかい？」

「は……？」

「私の在任期間も僅かだが、最後に念願だったキールアとの国交樹立を達成できそうなんだよ！ もうあの国も随分体制が整ったみたいだしね。いやいや、心配することはない。君はあの国でも十分有名人だ」

「……………」

ああ、俺の人生は、どこから狂ってしまったのか。

「おい、飛鳥くん？」

気が遠くなるのを感じながら、俺は、俺のささやかだが平凡な人生に、終わりが告げられたことを思い知ったのだった。

完

## 第十九難 最高の別れ？（後書き）

まずは、最後まで読んで下さった皆様に、感謝の気持ちでいっぱい  
です。皆様のおかげで、何とか完結できました^^

次は、無謀ながらも、歴史ものに挑戦したいと思っています。興味  
がある方は、どうぞまたお付き合いくださいませ。

本当にありがとうございました！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4773b/>

---

デンジャラス・ガール

2010年10月10日22時12分発行